

(様式第1号)

平成26年度第2回 芦屋市立図書館協議会 会議録

日 時	平成27年3月17日(火) 14時～15時30分
場 所	芦屋市立図書館本館2階集会室
出席者	委員長 梓 加依 委員 北里 佐和子 委員 熊本 潤子 委員 松本 淳子 委員 渡辺 宏子 事務局 社会教育部長 中村 尚代 図書館長 丸尾 恵子 図書館係長 長谷川 真弓 図書館係長 山口 淳 臨時的任用職員 延永 奈央
欠席者	芝 勝徳・白水 雅子・水谷 孝子委員
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0人

1 会議次第

- ① 平成27年度予算(案)について
- ② その他

2 提出資料

資料1 平成27年度予算(案)資料

3 審議経過

(事務局挨拶)

社会教育部長より挨拶

(図書館協議会開会)

(梓委員長)

ただいまから、図書館協議会を開会します。この会議は公開となっております。芦屋市の情報公開条例第19条に基づき、ホームページにも掲げられますので、よろしくお願いいたします。

(事務局より、平成27年度の予算案について報告)
平成27年度の予算案報告の説明は以上です。

(梓委員長)

ありがとうございます。質問がありましたらどうぞ。
特にありませんので、この議題については終了となります。

(事務局 丸尾)

引き続き、平成26年度の図書館事業報告をさせていただきます。昨年4月17日より、本庁北館地下一階と阪神芦屋駅の通路部分に返却ポストを設置いたしました。設置から一定期間が経過し、市民にも周知されてきたため、返却冊数も順調に増えております。多い時は240冊ほど返却されています。設置している返却ポスト、独立型で置いてあるものですが、その容量が250冊弱程度ですので現在時間を決めて返却ポストから回収して、交換する業務を委託して返却した本があふれないように対応しています。

資料収集については、図書費の中でも児童図書購入費の割合を増やし、購入を積極的に行いました。主に基本図書の買い替え、調べものの資料でシリーズものを買替えるようにしました。前年度は児童図書を3565冊購入しましたが、今年度もそれに近い冊数になる予定です。他の図書館事業はこどもおはなしの会、絵本の会、小学生の本の部屋など子ども向け行事のほか、金曜シネサロン、読書講演会、震災資料展などを開催しました。定例につきましてはまだ人数等確定しておりませんので、それ以外でご報告させていただきたいと思えます。

阪神淡路大震災より20周年ということで1月17日から23日の期間、震災資料展を開催しました。「阪神大震災被災地町名入り航空写真集－阪神大震災から100日－」という資料がありまして、1枚1枚が分かれている地図になっているものです。芦屋周辺の地域をつなげて一枚ものの大きな地図にして展示をしました。この地図の展示は好評で長時間熱心に地図をご覧になっている方も多数受けられました。震災資料展の開催中は市内のいたるところで記念式典等が多かったので、入場者数は6日間で207名と決して多くはなかったのですが、今回展示準備を行う過程で、当時市内で貼られていた実際のポスターであるとか、新聞等も展示しましたが、やはり紙資料ならではの伝える力の強さを感じましたし、震災資料の収集や整理、保存方法については、定期的に再検討していく必要性も感じました。

読書講演会については、2月12日に芦屋西宮研究所の副所長で当市のルナホール事業も企画されている小西功治さんを講師に招いて「阪神間少年・村上春樹の図書館をめぐる冒険」というテーマで開催しました。例年当館の読書講

演会は申込みが少なく、参加する方の反応が判りづらいというのが悩みどころでしたが、今回は53名の参加がありまして、受動的ではなく参加されているという雰囲気がありました。パワーポイントを使用し、写真資料等を多用した内容で、「楽しかった」「最後まで興味深く聴けた」という感想を直に職員に伝えてくださる参加者もいらっしゃいました。

芦屋にお住まいの方は、特に芦屋という土地に愛着を持っている方が多いと思いますので、今回の読書講演会も、芦屋市にゆかりのある村上春樹と彼の通った芦屋と西宮の二つの図書館という内容であった事が好評だった理由ではないかと考えています。今後も郷土に関する内容を盛り込んだ形で開催していければと思います。

2月25日は、「大人が楽しむおはなしの会」を開催しました。この催しは図書館の定例行事で、当館の児童担当職員とおはなしボランティアの方たちが普段子どもたちの前で語っているおはなしを大人の方にも聞いていただく機会を作り、児童文学や子どもの読書について関心を持っていただけたらという趣旨で行っているものです。毎年人気のある行事なのですが、今回は41名の参加がありました。ゲストには兵庫県子どもの図書館研究会代表、芦田悦子さんを招いてエリナー、ファージョンの作「ヒナギク野のマーティンピピン」という本の中から「エルシー・ピドック夢の中で縄跳びをする」というお話を語っていただきました。お話を通して文学作品にふれるということは、読むだけでは感じられない驚きや発見もあるかと思しますので、あらゆる年代の方に体験していただけるよう今後も大人対象のおはなしの会を継続していく予定です。図書館の運営報告については以上です。

(梓委員長)

今の事業報告について何かご質問やご感想はありませんか。「大人のためのおはなしの会」の参加は多いですね。昨年度も芦田さんが来られたのですね。

講演会は、今年は53名来られて村上春樹という内容と地域に根付いた内容が良かったのではないかというお話でしたが、前回、うまく宣伝できないのかという協議会からの意見も出ていましたが、何か特別にされたのでしょうか。

(事務局 丸尾)

今回は私も企画の方を担当させていただき、PR方法等を講師の方とも相談して進めていったので、それが良かったのかなと思います。

(梓委員長)

特に違った形といえば、何をされたのですか。

(事務局 丸尾)

ポスターをカラー刷りにして、従来、図書館施設や学校を中心に掲示していたのを、病院や市民課の窓口等にも掲示依頼を行いました。さらに、市役所地

下駐輪場の横にある返却ポストにもポスターを掲示し、阪神芦屋駅を往来する方にも見ていただけるようにしました。また、講演会のPRについては講師の方にもご協力いただきました。

(梓委員長)

効果があったということですね。

(事務局 丸尾)

そうですね。

(梓委員長)

病院等の掲示するのはよいですね。病院で待っている間は時間もありませんし、色々なポスター見ていらっしゃるから、案外効果があるかもしれません。

(事務局 丸尾)

講演会の最後に、参加された方に今日の講演会を何で知ったのかを尋ねたところ、一番多かったのはやはりチラシや図書館のポスターを見たという回答でした。

(梓委員長)

昨年度参加者が少ないと仰っていたので、今年はいい形で参加していただけたという事ですね。

(松本委員)

平成26年度の事業計画案の方を確認しながら聞いていたのですが、震災資料展は計画案には入っていなかったようですが、いろいろと工夫され、取組されているなど思いながらお話をうかがっていました。

(梓委員長)

本当ですね、知らないところで色々と工夫してくださっていて、それがこういう形で少しずつ目に見えて出てくるのかなと思います。

この図書館協議会の中で委員の皆さんがいろんな提案をしてくださっているのですが、この場で意見は反映されていると思います。

講演会も意外と「返却ポストのポスターを見た」という方が多かったのだとしたら効果があるのかもしれないですね。どこに貼られているポスターを見たのか具体的に調べて効率よく掲示するというのがあるのかもしれない。

(熊本委員)

以前、「大人が楽しむおはなしの会」に参加させていただいたことがあって、楽しかったのですが、一年に一回しかないのが残念です。定期的にされていたら、参加できるのにと思いました。

(梓委員長)

予算の問題であれば、講師を呼ばなくてもボランティアでして下さる方はいらっしゃるのではないのでしょうか。

(事務局 丸尾)

「大人が楽しむおはなしの会」は、図書館で活動しているボランティアの方や、図書館職員が日頃、どのようにして、行事を通して子どもと本を結びつけているのかを大人にも知っていただきたいという趣旨で行っていますので、必ずゲストが必要ということではありません。

(梓委員長)

回数を増やすというのは考えられますか。

(事務局 丸尾)

北里委員もおはなしボランティアで活動されているのでよくご存じかと思いますが、毎年2月あるいは3月あたりにおはなしの会をしますが、そこに焦点を合わせて3か月ほどかけて準備をしていますので、頻繁に行うのは難しいかもしれません。

(梓委員長)

おはなしも、覚えないといけないですね。

(事務局 丸尾)

おはなしを覚えるのもそうですが、プログラムの構成、リハーサルや調整等の準備が必要であるため、毎月や年に3～4回開催するのは困難であると思います。

(梓委員長)

年に2回くらいの実施は考えられないでしょうか。とても人気のある行事ですし、いろいろなものが機械化されて、肉声で面と向かって表情や仕草、全部含めて人と対峙するという場面が非常に減ってきているので、今の時代であるからこそ、大人にもそうした機会が必要であると思います。

私も図書館で活動をしているのですが、お子さん連れて来られるお母さんたちが、行事に参加される時、子どもを前に座らせて、自分は後ろでスマホを見たりされているのですね。そのため、子どもさんをお母さんのお膝に必ず乗せてもらうという形にして、少しスキンシップができるようなプログラムを入れることにしたのです。子どもはお母さんのおひざが大好きですから、大分雰囲気もかわってきて、お母さんも楽しんでくださるようになりました。大人にも必要な行事であると思います。

(北里委員)

ボランティアグループの中でも、回数を増やすことができるのでは…という話は出ているのですが、実際やるとなるとどういう日時等設定をしたら、皆さんが参加しやすいのかを伺ってからの方がより効率的ではないかという意見はでています。

(梓委員長)

ボランティアグループでプログラムを作って、日時と会場を図書館でおさえ
てもらおうということができればいいのではないのでしょうか。

(北里委員)

図書館職員と協力して行う形で対応できればと思います。

(梓委員長)

図書館主催でボランティアグループが協力するという形で、ぜひ実施して
いただけたらと思います。

(渡辺委員)

今おはなし会の話で、準備にかなり時間がかかるとおっしゃっていましたが、
それを短くするのは難しいのですか。おはなしを全部覚えるという話がありま
したが。

(梓委員長)

おはなしを覚えるのもそうですが、例えば今おはなしするのであれば季節感
を入れようとか、プログラムの打ち合わせなど、いろいろ必要な準備がありま
す。

(渡辺委員)

「おはなし」というのは、すでに書かれているお話ではなく、語り手が作る
のですか？

(梓委員長)

すでに書かれているお話です。季節感を入れたり、語る方が語る話を選ばれ
たりすることで、時間がかかるのだと思います。ボランティアの方からも回数
を増やしてはという声もでてるので実現できるかもしれません。

(熊本委員)

私も以前、図書館のストーリーテリング講座に参加したのですが、覚えて語
られますね。私たちは朗読グループですので、本を見ながらですけど、図書館
ではおはなし会をされている。その違いは何でしょうか。

(梓委員長)

ストーリーテリングは日本に直訳すると「素がたり」といった方がいいので
しょうか。ストーリーテリングというと、お話や本を丸暗記するという風に思
われているのですが、それは一つの方法なのです。昔、炉端で語られていたも
のも実はストーリーテリングということになります。お話を作るのが上手な方
が自分でほら話を作って話すのも、実はストーリーテリングです。

松岡享子さんという方がアメリカのこども図書館で働いておられて、日本で
ストーリーテリングという言葉を広められ、それが図書館のサービスとされて
いたわけです。日本ではそういう言葉がなくて、図書館にある良い物語の本を

みなさんに聞いていただくため、「覚えて語る」ということだけが広まってしまったのですが、日本にも語りという文化はあって、炉端の語りもストーリーテリングです。おばあちゃん、おじいちゃんから聞いたお話を自分で再話して語るのもそうです。とにかく「覚えて語る」という点が朗読と違います。朗読の場合、いかに言葉を伝えていくかというところは一緒ですが、本を持てます。おはなしは、本は持てないので、時間がかかると思います。朗読の会があってもいいのではないのでしょうか。

(熊本委員)

図書館で提供されるということは、おはなしの会の方が良いからなさっているのですか。

(梓委員長)

ストーリーテリングを勉強されている方は、おはなしを覚えておられますが、朗読会のボランティアを作りたいと思われるのであれば、作られたらいいのではないのでしょうか。いわゆる文化の違いなのです。例えば歌舞伎と普通のお芝居の違いのようなものです。どちらも一緒にされているグループもありますが、それぞれ手法が違いますから、別の文化だと思ってくださればいいのではないのでしょうか。絵本の読み聞かせは、絵を見せなくてははいけませんから、また違うジャンルです。朗読のグループを作っていたらいいですね。

(熊本委員)

30人ぐらいグループにいますので、もし図書館からそういうお話があれば。

(梓委員長)

耳から聞く文化というのはとても大事です。ぜひ、大人のためのよい催しをしていただければと思います。事務局、そのほかの議題についてもありますか。

(事務局 丸尾)

図書館としましては、委員の方から図書館についてご意見等を出していただければと思います。

(梓委員長)

図書館の行事や活動、あるいは運営に関して、なにかご提案はございませんか。

(松本委員)

図書館の入口にある、ガラスの展示コーナーを見ましたら、ペンギンの本が飾ってありました。表紙だけでなく、中が読めるように本を開いて展示しており、「これくらいの大きさの字なら、子どもでも読めそう。」などと思いながら見せていただきました。表紙とともに中が見えるように展示してあれば、自分から読みたいという気持ちになるので、いい展示方法だと思いました。

(梓委員長)

私は気づきませんでした。展示されていたのは『ながいながいペンギンの話』ですか。

(事務局 丸尾)

はい、そうです。図書館の東玄関の横になるのですが、ショーケースがありまして、定期的に本を展示しています。

(梓委員長)

それはどなたかのアイデアなのですか。

(事務局 丸尾)

ディスプレイ担当の職員が飾ってくれています。

(梓委員長)

挿絵のあるところなどを開いて展示してもらえたら、いい展示ですね。私も帰りに見てみます。それは子どもの本だけでしょうか。

(事務局 丸尾)

ショーケースの展示は子どもの本が中心です。あとは、本だけ飾っていても寂しいので、切り紙等を貼ったりしています。

(北里委員)

私も展示を見せていただいて、職員の方にお伝えしました。松本委員がおっしゃったように、興味を持つというか、一冊は本を開いてあったり、違う本は表紙を見せてあったり、詩集がおいてあったり、折り紙でペンギンが作ってあったりと、以前より工夫をしてくださっているの、ありがたいなと思いました。この間、幼稚園くらいのお嬢さんを連れてお母さんが通りかかれ、ふと展示に目をとめられて、子どもさんの目線からでは見えないので、お母さんが抱き上げて、一緒に楽しそうにご覧になっていました。少しでも興味を引くような展示がいいなと思いました。

(梓委員長)

その工夫がちゃんと利用者に届いているのですね。そうした利用者の声が聞けるというのは嬉しいですね。なかなか担当職員にまで届かないので、ぜひこの事は展示の担当者にお伝えください。張り合いになると思います。

(熊本委員)

委員になって、初めのうちはご意見をきくばかりでしたが、何年かたって、意見を言えるようになり、図書館のことを隅々までよく見る事が出来るようになりました。展示も楽しみですし、図書館に入る前にかわいい展示を見せていただいて、ロビーに入っても綺麗にしてくださるので、気持ちよく利用できる配慮をいつも感じています。

(梓委員長)

市民として、このような事ができればいいなというご提案はありませんか。

(熊本委員)

私は朗読ボランティアグループの代表として来ていますから、グループみんなの意見を聞いてくるわけですが、私たちの活動と図書館とがもっとうまくつながっていけばいいなと思います。図書館のすぐそばで活動をしていますので、図書館から依頼を受けて朗読CDを作成していますが、一部の人に対してだけでなく、もう少し声をかけていただけたら、何か手伝えることがあるのではないかと思います。

(梓委員長)

そうですね。今回提案していただいた、朗読の行事ができればいいですね。

(事務局 山口)

私は図書館に来て3年目なのですが、皆さんのご意見も毎年レベルアップしていますので、そちらも勉強しながらフォローできるように心がけたいと思います。今日、委員長からお話していただいたこと、ストーリーテリングでも何通りもあるのだということなど、本当に市の職員でも知らないことがあると思います。図書館を通じて市民の方の思いを発信していただけるような環境を作ることが大事だと感じます。

(北里委員)

前回の協議会で、図書館にコンシェルジュのような方がいればいいのではという意見が出たと記憶しているのですが、図書館に限らずどんな場でも、人と人を介してというのが望ましいなと思います。職員がお忙しいのを重々承知していますが、例えば読書週間の一定の時期、特別のカウンターを設置して、児童担当の方が「今日は本についてなんでもお答えします」と親子で来館しやすい時期に企画されてはいかがでしょうか。

(梓委員長)

図書館に来やすくなるというか、興味をもっていただけるかもしれません。

(北里委員)

以前に館長から、利用者の方もカウンターに気兼ねしながら尋ねに来られているのではないかと、フロアワークをしていると利用者から声をかけていただけるという話がありました。より利用者が声をかけやすいような何かがあれば、図書館側の意識や意欲も利用者に伝わって、利用者の気持ちもより図書館に伝わって、本を介してつながるのではないかと思います。

(梓委員長)

今、ご提案が出ましたが、職員でなくても子どもさんの本に関してなら、ボランティアの方に手伝っていただくなどすれば可能ではないでしょうか。

(事務局 丸尾)

「こどもの読書週間」と「読書週間」という機会が年2回ありますので、そういう時期に考えていくことはできるのではないかと思います。

(梓委員長)

図書館の仕事には、読書相談というものがあります。レファレンスといって、調べものの相談もそうですが、お勧めの本がないかなどの問い合わせに応える読書相談もあるのです。ただ、担当者をなかなか置けない。ですから、ボランティアの方にもお手伝いいただいて、年に何度か相談できる機会を作られてはどうでしょうか。そうすれば、図書館に来やすいというか、親しみを持ってくださると思います。機械化の中で育っている子どもたちなので、図書館が人と直接出会う場所であることはすごく必要なことだと思います。大人たちもインターネットですぐ調べてしまいますが、図書館で尋ねていただくのがいいのではないのでしょうか。今、子どもたちのコミュニケーション力がすごく低下していること等が危惧されていますので、図書館の担う役割というのは大きいと思います。芦屋ではアナログなものを求めておられるご意見も出ています。インターネットで図書が読めるようにしてほしい等、いろんなご意見があるかと思いますが、どこの図書館でもそうしないといけないわけではないのではないかと。図書館が担える大切なことをしていかれたらよいのではないかと思います。

また、市民の方たちやボランティアの方たちから「手伝います」というお気持ちも伝わっているので、図書館も市民の方とにかくに手伝っていただけるか、コーディネートしていかれたらいいと思います。

(渡辺委員)

昔、点訳をされていて、ある言葉がどうしてもわからず、図書館の方に尋ねましたら、色々な本を出してこられて、とても詳しく教えて下さって、感激したことがありました。「なんでもお聞きします」という表示をするなど、声をかけやすいような雰囲気を作ってくださいるといいのではないかと思います。

(梓委員長)

それはレファレンスといって、図書館の専門職として実は一番大事な仕事です。今おっしゃっているようなことに対応するのが本来の司書の仕事なのです。レファレンスの窓口にもいつも1人職員がいて、困った人がいたら自らが進んで声をかけるのが一番いいのですが、今は司書が日々の業務に追われていて、本来の仕事ができていないと、色々な図書館を見ていて感じます。機械化や人員補充ができれば、相談窓口を作れるのですが。神奈川では本好きのボランティアグループの方で、そういった相談窓口を作っている図書館があります。しかし、本来は司書の仕事ですので、民間委託やボランティアに頼めばいいということではないと思います。苦肉の策として、本の好きな方に関わっていただくという方法もあるかと思っています。本当は職員が増えて、対応する専任者が1人

いるのが望ましいのですが。他には事務局，なにかありませんか？

(事務局 丸尾)

前回の協議会でもご提案いただき，今回，再度ご提案いただきましたレファレンス，調査相談に関してですが，窓口で声をかけやすい雰囲気づくりのお話が出たことと，図書館で相談できるという事がまだ利用者に浸透していないようなので，そのあたりの周知も考えていかななくてはいけないと思います。

(梓委員長)

レファレンスや相談窓口というより，「何でも相談してください」という，もう少し言葉を柔らかくして，いつでも来ていただけるような工夫をしていただき，司書が本来の仕事ができるようになればいいと思います。

以上で図書館協議会を閉会します。ご協力ありがとうございました。

以 上